



日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1. 報告・お知らせ

- 1-1 平成19年度 第2回常任理事会報告 ----- 2
- 1-2 役員選挙結果報告 ----- 6
- 1-3 編集委員会からの報告・ご案内
 - ・平成19年度第2回編集委員会報告 ----- 8
 - ・『音楽教育実践ジャーナル』Vol.15 No.2 特集・原稿募集 ----- 9

2. 大会のご案内・報告（日本音楽教育学会関係）

- 2-1 第38回全国大会（岐阜）のご案内（3） ----- 10
- 2-2 日韓合同ゼミナール第2次案内 ----- 11

3. 海外トピックス

- 3-1 APSMER/ISME Regional Conference 2007バンコク大会報告 ---- 12
- 3-2 韓国音楽教育学会ソウル国際シンポジウム報告 ----- 14
- 3-3 国際交流委員会 海外の動向 その4
韓国の音楽教育事情について ----- 15
- 3-4 ISME 2008ボローニャ大会に向けて ----- 17

4. 国内トピックス

- 平成19年度第1回中国四国地区例会 ----- 18

5. 事務局からのお知らせ ----- 18

- 編集後記 ----- 19

1. 報告・お知らせ

1-1 平成19年度第2回常任理事会報告

日時：平成19年7月8日(日)13:00~16:00

会場：日本女子大学新泉山館 503 室

出席：有本・今川・奥・加藤・島崎・坪能・降矢・村尾 〈参事〉大沼(記録補助)

欠席：岩井・岩崎・阪井・佐野

【報告事項】

1. 会務報告(有本事務局長)

5月13日(日) 第1回常任理事会・理事会

第1回日韓合同ゼミナール実行委員会

第1回編集委員会

6月 9日(土) 第2回選挙管理委員会

6月16日(土) 選挙投票用紙発送

6月29日(金) 音楽教育学37巻1号・ニュースレターNo. 28発送

6月30日(土) 理事選挙締切・会長再選挙投票用紙発送

2. 会長選挙再投票について(有本事務局長)

- ・有本事務局長より、会長選挙再投票について、以下のような報告と謝罪があった。

6月16日付で発送した会長被選挙者名簿に誤りがあると、6月20日に村尾理事他から指摘があった。これは、新会則附則2項および旧会則第11条が反映されていなかったための誤りであり、急遽会長選挙の再投票を行うことを決定した。再発送準備に日数を要するためと、会員の投票行動を極力混乱させないため、6月30日(理事および会長の投票締切日)に再発送作業を行った。締切は7月10日(消印有効)とし、開票は7月14日。

会員に多大なご心配とご迷惑をおかけし、会計の損失を招いたことに対して、陳謝したい。

- ・奥理事より、「被選挙人名簿に会員番号を付加することは不要ではないか。被選挙人について学会在籍年数を示唆することになる」との指摘があった。これについては、次期執行部への検討引継ぎ事項となった。

3. 各委員会報告

(1) 編集委員会(小川委員長より有本事務局長へ報告)

- ・学会誌編集の状況について、以下のように報告された。

『音楽教育学』37巻1号：6月30日に発送済み。

『音楽教育学』37巻2号：2件の投稿原稿を採択。

『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 5 no. 1(通巻9号)：入稿済み、7月下旬より初校開始予定。

『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 5 no. 2(通巻 10 号)：特集タイトルが「音楽科の教師
力ってなに？」に決定。応募要項については、ニュースレターNo. 28 にて広報済み。

- ・望月由美子委員が健康上の理由により辞任し、後任が齊藤忠彦氏に決定した。
- ・8月5日静岡大学にて第2回編集委員会、及び学会誌検討委員会を開催する予定。

(2) 国際交流委員会(奥理事)

- ・英文ホームページの原稿が完成した。理事による校正を経てホームページ上に掲載する。
- ・ニュースレターの国際交流委員会関係頁には毎号、記事を掲載予定であり、担当者を決定している。

(3) 40周年記念論文集編集委員会(今川理事)

前回のニュースレターに募集要項を掲載した。現在は会員による投稿を受け付けている。

5. 第39回国立音楽大学大会(藤沢会員より坪能会長へ報告)

日程は、2008年10月18日(土)・19日(日)の両日を検討中。他学会との調整を行ない、決定する。

6. その他

坪能会長が韓国音楽教育学会50周年記念「2007 韓国音楽教育学会ソウル国際シンポジウム」(ソウル COEX 会議場 2007.5.26)に招聘され、出席した旨が報告された。詳細はニュースレターNo. 29に掲載の予定。

【協議事項】

1. 第38回岐阜大会時間割について(島崎理事)

- ・大会日程(時間割)案が提出されたが、再調整を行うこととなった。
- ・基調講演について、大会実行委員会と常任理事会との連携のあり方については、今後の検討課題として、引き継ぐこととなった。
- ・「共同企画」については今年度大会以降、『音楽教育学』に報告を掲載することに決定した。ページ数は企画の応募件数によって変動するが、今年度は10ページを目安とする。

2. 40周年記念事業(坪能会長・村尾理事)

学会賞について坪能会長より文案が提示され、協議の結果、以下の通り承認された。この文案は、次回理事会・総会に提出される。

〈学会賞について〉

- 1) 学会40周年を記念し、日本音楽教育学会に学会賞をおく。
- 2) 2年に1回、学会賞の受賞者を決定する。
- 3) 過去2年間に『音楽教育学』及び『音楽教育実践ジャーナル』に掲載された研究論文の中から1編を選ぶ。
- 4) 審査委員は、会長、当該期間の編集委員長、および学会誌編集委員で常任理事、理事の経験者の中から、研究分野・方法を考慮して、会長が6名(会長を加え7名)を指名し、常任理事会で決定する。
- 5) 審査委員長は委員により互選する。

〈第1回学会賞について〉

1) 第1回の受賞論文は、2005年度から2008年度にかけて（過去4年間）『音楽教育学』及び『音楽教育実践ジャーナル』に掲載された研究論文の中から1編を選ぶ。

2) 審査委員案

木村 次宏（2005-2006年度編集委員長）

小川 容子（2007年度編集委員長）

2008年度編集委員長

2008-2009年度会長

他の3名については、今年度内に決定する。

3) 審査委員長は委員により互選する。

4) 日程

2009年 2月頃 第1回審査委員会

委員長の決定

審査のための細目を決定

2009年 5月頃 第2回審査委員会

受賞者の内定

2009年 7月 常任理事会での報告・承認

2009年 8月 受賞者への通知およびニュースレターで発表

2009年10月 大会総会において、授与式

5) その他

・受賞者には賞状の他、賞金として3万円を授与する。

・学会賞については、会則には含めず、新たに規定を設ける。

3. 第9回音楽教育ゼミナール(奥理事)

日韓合同ゼミナールのチラシ及びポスターのデザインが披露された。

4. 参事の委嘱について(坪能会長・加藤副会長)

東京学芸大学大学院より高鶴ゆら・前木洋美・裕沢未沙の3名、日本女子大学より味府美香の1名、計4名が参事に推薦され、承認された。

5. 2008年度国立大会プロジェクト研究について(坪能会長)

・今年度のプロジェクト研究2となる「音楽系大学のイノベーション」は、来年度「教育系大学のイノベーション」（仮）として継続とする。

・2008年度-2009年度のプロジェクト研究のテーマについて、奥理事・村尾理事より案が出された。これを含め、各常任理事はテーマについて再度検討し、8月末までに会長宛に案を提出することとなった。

6. 新入会員及び退会者の承認(有本事務局長)

・5月13日以降、新規入会申込者が正会員31名、学生会員2名、計33名あり、承認された。

・申し出退会者が3名あり、承認された。

・平成19年7月3日現在、正会員数1489名。

新 入 会 員

会員番号	氏 名	所 属 先
3425	安宅 智子	広島大学（院生）
3426	岸川 良子	第一保育短期大学
3427	柴戸 亜樹	第一保育短期大学
3428	立本千寿子	大阪女子短期大学
3429	小笠原吉秀	日本大学高等学校
3430	井上 博子	福岡教育大学（院生）
3431	志村 泉	信州大学（院生）
3432	坂本 直美	広島大学（院生）
3433	山村 朋子	広島大学（院生）
3434	久保田和子	関東短期大学
3435	鈴木 怜	名古屋市立志段味東小学校
3436	越後 真理	滋賀大学（院生）
3437	宮崎 将三	広島大学（院生）
3438	村島 唱子	広島大学（院生）
3439	谷中 優	金沢星稜大学
3440	吉村 智宏	長岡市立上組小学校
3441	石島 智子	千葉大学（院生）
3442	橋田 光代	関西学院大学（博士研究員）
3443	粕沢 未紗	東京学芸大学（院生）
3444	高鶴 ゆら	東京学芸大学（院生）
3445	森田香菜子	東京音楽大学（院生）
3446	前木 洋美	東京学芸大学（院生）
3447	松村 亜希	福岡教育大学（院生）
3448	奈良 紀子	群馬社会福祉大学
3449	齋藤 朝子	
3450	大金 和憲	東京学芸大学附属高等学校 大泉校舎
3451	北崎 あゆみ	滋賀大学（院生）
3453	登 啓子	東京田中短期大学
3454	古山 律子	日本女子大学（院生）
3455	町田 直樹	貞静学園保育福祉専門学校
3456	小野 亮祐	広島大学（院生）

7. その他

第 40 回大会の開催校については、次回理事会で決定し、本年度総会にて報告する予定。

【次回理事会】

平成 19 年 11 月 9 日(金)14：00 ～ 岐阜大学

1—2 日本音楽教育学会会長選挙結果報告

平成19年7月18日

日本音楽教育学会選挙管理委員会
委員長 中館 栄子

日本音楽教育学会会長選挙の結果を下記の通り報告いたします。
尚、これは再投票による結果です。

記

有権者数：1,306

当選者〔得票数〕	次点者（得票数）	総票数（人）	投票率（％）
(62) 吉田 孝	(38) 加藤 富美子	327	25.0

総投票者数 327票 （内 白票 7 無効 0）

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長	中館 栄子
副委員長	本多 佐保美
委員	小島 千か
〃	志民 一成
〃	早川 富美子

平成19年7月18日

日本音楽教育学会理事選挙結果報告

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長 中 館 栄 子

日本音楽教育学会理事選挙の結果を下記の通り報告いたします。

記

有権者数：1,307

地 区	当 選 者	当 選 者	次 点 者	総票数（人）	投票率(%)
北海道	尾藤弥生		中村隆夫	16/47	34.0
東 北	降矢美彌子		白石文子	16/80	20.0
関 東	坪能由紀子	佐野 靖	本多佐保美	107/544	19.7
	八木正一	筒石賢昭			
	井口 太	藤澤章彦			
	田中健次	小川昌文			
北 陸	齋藤忠彦		伊野義博	13/70	18.6
			中山裕一郎		
			茂手木潔子		
東 海	村尾忠廣	北山敦康	新山王政和	35/115	30.4
近 畿	杉江淑子	嶋田由美	田畑八郎	39/190	20.5
	安田 寛				
中国四国	吉富功修	三村真弓	小川容子	52/149	34.9
九 州	津田正之	岩崎洋一	竹井成美	31/112	27.7

*地区違いの無効 2，記載事項の無効 4

総投票者数 309 票（内 白票 6 無効 6 ）

投票率 23.6 %

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長 中 館 栄 子

副委員長 本 多 佐保美

委 員 小 島 千 か

” 志 民 一 成

” 早 川 富美子

1－3 平成 19 年度第 2 回編集委員会報告・お知らせ

編集委員会委員長 小川容子

報告：平成 19 年度第 2 回編集委員会

8 月 5 日に、静岡大学で本年度第 2 回目の編集委員会（平成 19 年度第 2 回編集委員会）がおこなわれ、以下の事項について協議しました。

1. 投稿原稿の「受付日」と「受領日」を分けました。これまで、投稿された原稿が学会事務局に到着した日を「受領日」として葉書でお知らせしておりましたが、これを「受付日」としました。というのは、投稿規程の書式に則っていない原稿が散見されるようになってきたからです。査読の段階はもとより、印刷や校正の段階でもこうした原稿はさまざまなトラブルをひきおこします。ですので、こうした原稿が投稿された際には投稿者ご本人にお伝えして、改めて投稿し直していただくことになりました。ご承知おきください。

2. 投稿原稿の査読状況について「音楽教育学」では、再査読が 3 件、査読が 2 件あります。「音楽教育実践ジャーナル」では、査読が 2 件あります。

3. 投稿原稿の査読結果について

「音楽教育学」では、1 件の原稿が採択となりました。

「音楽教育実践ジャーナル」では、2 件の原稿が採択となりました。

2 件のうち 1 件は、「特集への投稿原稿」として採択することにしました。

4. 「音楽教育実践ジャーナル(通巻 9 号)」の進捗状況等について

5. 「音楽教育実践ジャーナル(通巻 10

号)」の内容等について

6. 「音楽教育学 第 37 巻—2 号」の今後の作業予定等について

7. 「音楽教育学 第 38 巻—1 号」の内容等について

8. その他

<お願い>

最近、学会誌への投稿原稿が増えてきました。大変有り難いことです。会員の皆様の主張がぎゅっとなつまった原稿を手にするたびに、いつも身の引き締まる思いがいたします。それぞれの原稿の担当者はもとより、私たち編集委員は正確に、且つ忠実に、皆様の意見を発信しようとしております。できるだけ正確に発信しようとする、実は意外にも、細かいことが気になってきます。本文中の引用文の書き方、注の書き方、句読点、図表の書き方、引用文献の年号、一行あたりの文字数、行数……。些細なことです。でも、とても大事なことだと思います。投稿者の最低限のマナーともいえるでしょう。皆様が所属されている他の学会の投稿規程とは、異なる規程にしている箇所もあります。投稿される前には、今一度、投稿規程をご確認ください。

現在、編集委員会においてもっと詳細な「投稿規程」及び「スタイルガイド」を作成しようとしております。出来上がり次第、改めてご報告いたします。

『音楽教育実践ジャーナル』通巻 10 号 (2008 年 3 月発行) の特集に向け、下記の要領で引き続き、原稿を募集しております。どしどし原稿をお寄せください。

第 2 学会誌として 5 年前にスタートした本誌も、おかげさまで通巻 10 号を数えることになりました。これまで、音楽教育実践に関わるさまざまな場面やさまざまな内容を捉えた特集が組まれてきましたが、本号では実践をする主体である「教師」に目を向けてみました。とりわけ、「音楽科の教師力」に焦点をあて、そもそもどのような力が求められているのか、どのように育てていけばいいのか、一緒に考えてみたいと思います。

平成 17 年の中教審答申では、「学校の教育力、すなわち『学校力』を強化し、『教師力』を強化し、それを通じて、子どもたちの『人間力』を豊かに育てることが改革の目標」とであるとされました。また、今年に入って教員免許法の改正による教員免許更新制度の導入、さらには、教員養成課程の充実による教育の質向上が重要な課題とされるなど、現在「教師力」とはなにかということが大きく問われています。

中教審答申では、優れた教師の条件として、教職に対する強い情熱、教員の専門家としての確かな力量、総合的な人間力が挙げられています。しかし、子どもたちと音楽を介して向き合うためには具体的にどのような力を「教師力」と考えるのか、また、それを育てるためにはどうしたらよいのか、教員養成段階で最低限身につけておくべき「教師力」と、現場で磨いていく「教師力」は同じなのか、教育実習や現場体験は「教師力」をつけるためにどうあるべきなのか、学校の音楽科のみならず就学前教育等も含めた現場で求めている

「音楽科の教師力」はなにか等、改めて考えてみる必要があるでしょう。

「音楽科の教師力」が問われる場面はさまざまです。しかし、教師になるまでの力量形成と、現職として日々研鑽し、研修を積んでいくなかでの力量形成は、一人の教師の成長という連続した営みであるはずで、したがって、大学において教員養成・保育者養成に携わる側、現場体験・教育実習において教師志望の学生に関わる側、校内研修・初任者研修など現職教員の資質・能力向上に関わる側など、それぞれの場で「教師力」養成に携わっている方々からの取り組みの報告や提言、あるいは海外における取り組みの紹介等はお互いに興味深い情報交換の場となるでしょう。また、「教師力」を今まさにつけようとかがんばっている学生、教育実習生、新採用の教師の声もぜひお聞きしたいと思います。幼稚園、保育園、学校が音楽の教師（保育者）に求める力、地域社会が音楽の教師に求める力、音楽の専門家が考える「教師力」等、さまざまな「教師力」のあり方について議論し、「音楽科の教師力ってなに？」という問いに迫りたいと思います。会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、投稿の際には、特集の募集原稿であることを必ず明記してください。

特集タイトル

「音楽科の教師力ってなに？」

- 投稿原稿締切：2007 年 10 月末日必着（編集の都合上、締切の時期が早くなっていますのでご注意ください。）
書式、字数等は『音楽教育実践ジャーナル』投稿規程をご参照ください。
- 採択された原稿については、編集委員会から 11 月末日までに投稿者に連絡いたします。

2 第 38 回全国大会（岐阜）のご案内（3）

30 回（岐阜）大会実行委員会委員長 朝田 健

残暑厳しき折ですが、学会員の皆様方には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、いよいよ第 38 回大会が迫ってまいりました。実行委員一同皆様をお迎えするべく準備を整えております。

今回は岐阜へお越しいただく際の参考となる情報をお届けします。学会の詳細につきましては同封のプログラムをご覧ください。また、院生フォーラムの申込につきましては学会 HP をご覧ください。

1. 日時

平成 19 年 11 月 10 日（土）

11 日（日）

2. 場所

岐阜大学全学共通教育講義棟

3. 参加費

大会参加費および懇親会費は予約制になっておりますので、10 月 25 日（水）までにお振込をお願いします。大会間際の振込については、行き違いが生じる可能性があります。振込用紙が同封されております。なお、この振込用紙は、大会参加費以外には使用できません。大会当日には、振込済みの半券をお持ちください。

※大会当日、受付で参加費をお支払いになる方は、下記の金額となります。

当日受付払い 4,500 円

前払い（振込） 4,000 円

なお、出欠回答ハガキは、ご欠席の場合もお出してください。やむをえず総会へ出席できない方は、委任状への記入もお忘れなくお願い

いたします。

4. 懇親会費 5000 円

ただし学生（学部生、大学院生）は 2000 円（現職院生は除きます）。

5. 交通アクセス（<http://www.gifu-u.ac.jp/view.rbz?cd=393>）

（1）新幹線

名古屋駅から JR 東海道本線快速（大垣行、米原行）で岐阜駅まで約 18 分。または普通列車岐阜行で約 25 分

岐阜駅北口バスターミナル 3 番乗り場から「岐阜大学」「岐阜大学病院」行き（約 30 分）

（2）飛行機

①中部国際空港から

名鉄特急ミュースカイで、名鉄岐阜駅まで約 55 分。ただし 1 時間に 1 本です。その他の方法として、名鉄名古屋まで特急または急行に乗り、そこから名鉄本線の岐阜行に乗り換えることもできます。同じホームです。

名鉄岐阜駅 4 番乗り場「岐阜大学」「岐阜大学病院」行き（約 30 分）、または 5 番乗り場「岐阜大学病院」行き（約 35 分）。駅のエスカレーターを降りて道路を渡ってください。乗り場は反対車線側です。

②県営名古屋空港から（とちぎ帯広、秋田、山形、新潟、松山、高知より）

空港より名鉄西春駅行きバスにのり、名鉄犬山線西春駅より名鉄名古屋へお越しください。その後名鉄本線の岐阜行きに乗り換えてください。

（3）自動車

名神高速道路・岐阜羽島 IC から約 40 分
または東海北陸自動車道・岐阜各務原 IC から約 40 分です。なお、学内では駐車料金 100 円が必要です。

(4) バスについて

当日は土曜・休日ダイヤですので本数が少なくなります。そこでバス会社に増便の交渉をしています。詳細につきましては、10 月下旬頃に学会 HP に掲載しますのでご確認ください。

6. 昼食

大学の近くには食事をとれる場所がありません。当日は生協第一食堂が営業していますのでご利用ください。

7. 宿泊

岐阜市内には多くのホテルがあります。主に駅周辺地区と長良川地区に集まっています。駅周辺地区からは大学へのバスが便利です。岐阜城の夜景や長良川の風情にひたりたい方には長良川地区がおすすめです。

それでは、皆様のお越しをお待ちしております。

2—2 第9回音楽教育ゼミナール（日韓合同ゼミナール 2008）第2次案内

日韓合同ゼミナール実行委員長 加藤富美子

第9回音楽教育ゼミナールは、本学会と交流協定を締結している韓国音楽教育学会との共催による日韓合同ゼミナールとして、下記の要領で開催されます（同封のチラシを参照ください）。

公募による発表者募集に際し、両学会の会員のみなさまから積極的なご応募をいただき、日韓合同でのラウンドテーブル、個人発表、ワークショップ、ショート・シンポジウム、レクチャー・コンサート、コンサートという多彩なプログラムを組むことができました。

ぜひ多くの方々にご参加いただきたく、ここにご案内申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

テーマ：「日韓両国の音楽教育の理論と実践
～伝統音楽に着目して～」

日 程：2008 年 1 月 12 日（土）
13 日（日）

会 場：日本女子大学 目白キャンパス（百年館低層棟、桜楓館ホール）

プログラム：（詳しくは同封のチラシを参照ください）

- ・ ラウンドテーブル（5 本）
- ・ 個人発表（韓国から 3 本）
- ・ ワークショップ（6 本）
- ・ ショート・シンポジウム
「日韓両国の音楽教育の理論と実践～伝統音楽に着目して～」
- ・ レクチャー・コンサート（2 本）
- ・ コンサート 1）日本の音楽 2）韓国の音楽 3）合同演奏

参加費：学会員 8,000 円 当日会員 10,000 円（一日参加は別額）
学部学生 6,000 円

参加申込み：同封のチラシの要領で、11 月 25 日（日）までにお申込みください。

3. 海外トピックス

3-1 「APSMER/ISME Regional Conference 2007 バンコク大会」報告

村尾忠廣 (Chair: APSMER Advisory board members)



Musical Dialect (2) についてのパネルディスカッション

左から筆者, Narutt Sutachitt, Margret Barrett

【APSMER10 周年・ISME Regional Conference としての再スタート】

第 1 回のソウル大会 (1997) に始まった APSMER (Asia-Pacific Symposium on Music Education Research) が今年でちょうど 10 年目を迎える。APSMER のルーツは ISME のリサーチセミナー名古屋大会 (1992) にまで遡り、そして 1994 年に韓国の Hong-soo Lee を迎えて Gary McPherson, 筆者の 3 人で創設を決めたことに始まる。その間のことを振り返ると実に感慨深い。出会ったばかりの頃の McPherson はオーストラリアで博士号をとったばかりの若き、無名の研究者だった。それが、この間に ISME の会長にまでなるのである。ISME 会長となった Gary McPherson は APSMER を ISME Regional Conference として開催できないか、と提案してきた。ISME Regional Conference に関しては APSMER 名古屋

大会の組織委員長としてちょっと不愉快な経験があるだけに躊躇しないでもなかったが、結局同意して現 ISME 会長 Linane Hentschke と契約をかわした。これによって第 6 回 APSMER バンコク大会は、ISME Regional Conference in Asia Pacific Countries という二つのタイトルをもつ大会となったわけである。

バンコク大会は、10 周年記念式典から始まった。式典では、まず、第 1 回のソウル、2 回のタスマニア、3 回の名古屋、4 回の香港、5 回のシアトル、それぞれの大会について会場や大会の様子が映像で映し出された。これは、大会組織委員会委員長の Narutt Sutachitt が資料を集めながら編集したものである。本大会は準備状況のもろもろが遅れて心配していたのであるが、この DVD の編集に象徵されるように大学全体の協力体制ができていて安心した。この後、各大会実行委員会の委員長が大会を

振り返る簡単なスピーチをし、セレモニーを終えた。

【基調講演・発表・パネルディスカッション】

基調講演は、Chetana Nagavajara, Wendy Sims, 徳丸吉彦の3氏。Chetana Nagavajara氏は音楽ではなく、ドイツ、英語、フランス語の文学、文芸批評が専門のタイ人であるが、音楽批評家としても活躍してきた人である。幅広い博識と音楽家との交流を交えたスピーチであった。Wendy Sims女史は幼児の音楽教育の世界的権威であり、講演も自身の研究事例を基にしたものである。が、アジアの子どもを養子にして育ており、研究の実践者でもある。今回も中国系の子どもを連れてきていた。日本の徳丸吉彦氏は、今年のISMEマレーシア大会に引き続いての講演。自国の伝統音楽の教育にあまり熱心でない日本の現状に不満を述べられていた。たしかに、韓国は自国の伝統音楽中心の音楽教育へと大転換を図ったのに日本の変化はほんの少しである。韓国で可能なことが日本で何故できないのだろう。来年早々に予定されている「日韓合同ゼミナール」ではそういうことをも研究レベルで議論したいものである。

パネルディスカッションと個人発表、ワークショップは並列発表であった。残念であったのは、日本人の発表が同じ時間帯に重なることが多くあったこと。そのため今田氏（弘前大学）に司会、とりまとめをお願いしていた「East meets West」のディスカッションにも個人発表の合間に顔をだしていたので、内容的な成果を評することはできない。が、司会の流暢な英語と共に

全体を一つの方向へとりまとめてゆこうとする状況だけはよく把握できた。筆者とNarutt Sutachitt, Margaret. Barrettの3人で企画したパネルディスカッション「What is musical dialect, how to teach it at school?(2)」は、我田引水かもしれないが、まれにみるほど面白く、刺激的な内容となった。民族伝統音楽のMusical Dialectは、西洋的なソルフエージュでなく、モデルの全体模倣を基本にすべし、というのが一般論調である。しかし、N. Sutachittはコダーイの階名視唱を導入する。その後、タイ語をつけて歌うのであるが、タイ語は声調言語（tonal language）であるので単語によってピッチカーブをつけてゆく。そうした細かいステップを自ら歌って示しながら、最終的にタイ伝統音楽の歌唱にたどり着くのである。一方、Barrettは“Who's Musical Dialect?”と問題提起し、3歳児が真似るロックシンガーのDialectを紹介した。あまりに面白いビデオに会場は爆笑したが、同時に幼児の歌唱を深く問い直すものでもあった。

奥忍氏が中心になって企画されたISMEパネルディスカッションは、今アジア諸国で共通の問題となっている独立した音楽科と統合教科としての音楽という問題をテーマとした。このパネルディスカッションのために作成された資料は貴重である。多くの方が活用できるようにWeb上で資料の保存が予定されている。

個人発表については残念ながらコメントするだけの紙面の余裕がない。が、本学会長の坪能由紀子氏がワークショップをおこなったことを付記しておこう。このワークショップのリズム創作遊びには、中国音楽

教育学会会長の Xie Jiaying と筆者も加わった。今大会には院生を含めて多数の若手研究者が参加していたので、これからは交流を兼ねた各国の若者を対象にしたワークショップへと発展できることだろう。

【Wrap up session ---- APSMER 2009 上海大会に向けて】

今大会では Closing に Wrap up session というものが設けられた。大会を振り返っての総括である。2005 年シアトル大会の委員長であった S. Morriosn 氏が本大会の全体の総括をおこなった。注目はその後である。大会委員長の N. Sustachitt 氏の大会報告は、本大会の参加者数、発表者数にとどまらない。発表内容の分野によるコンテンツアナリシス、研究方法別分析、さらには基調講演、パネル、個人発表別の参加者数——というように大会自体を研究の対象としたような評価・報告をおこなったのである。筆者は長い間さまざまな国際学会の大会や運営にかかわってきたけれども、このような Wrap up session は初めての

経験であった。大会を自ら評価する締めくくりは次回大会に向けてきっと活かされてゆくことだろう。

さて、その次回 2009 年大会であるが、中国、上海（上海音楽学院）に決定された。ISME 2010 年世界大会が北京であるから、万博の上海と重なるような中国、中国音楽教育の国際化である。アジアの若手音楽教育研究者がどんどん国際化し、研究能力を高めてきている。心配は日本の若手研究者が国際化できないことである。そのために、今の台湾の研究レベルの高さについて知らない。日本がどんどん取り残されてゆくような気がする。ぜひ、同じアジアの研究者と友達になり、共同研究をおこなって欧米と対峙するような気概をもってほしい、と思う。来年の ISME ボローニャ大会、2009 年の APSMER/ISME 上海大会、2010 年 ISME 北京大会——今から予定し、計画し、アジア地域共同研究のグループを立ち上げて発表してほしいものである。

3-2 2007 韓国音楽教育学会 ソウル国際シンポジウム 報告

駒 久美子（日本女子大学大学院生）

2007 年 5 月 26 日、ソウル COEX カンファレンスセンターにて、『2007 韓国音楽教育学会 ソウル国際シンポジウム』が開催された。本シンポジウムは、韓国音楽教育学会 50 周年記念シンポジウムであり、アメリカ、中国、ドイツ、日本、韓国の 5 ヶ国から招かれた 5 名の音楽教育学者による講演が行

われた。会場の COEX カンファレンスセンターは漢江の南側ソウル市江南区にあり、COEX インターコンチネンタルホテルに隣接し、地下にはアジア最大規模と言われる地下ショッピングモールがあった。午前 9 時から午後 5 時まで、途中ランチやティーブレイクをはさみながら、200 名あまりの参加

者が集い、活気に溢れたシンポジウムとなった。

前 ISME 会長でイリノイ大学の音楽教育学科長である Gary McPherson 氏は、「教育における音楽の役割と本質のより良い理解へ向けて」というテーマで、音楽について一般的な認識と、子どもたちが学校のなかで、教科として音楽を学ぶことについて論じ、中国音楽教育学学会会長で中国音楽学院音楽研究所所長の Jiaying Xie 氏は、「学生は自国の歌を歌うことができない—中国の学校における伝統音楽の継承」というテーマで自国の音楽を学校教育の中で取り入れることの重要性を述べ、ドイツ、バンベルグのオット-フリードリッヒ大学教授である Stefan Hörmann 氏は、「ドイツ音楽教育

における最近の動向」というテーマで特に重要な現在の 4 つの動向について述べた。また日本音楽教育学会会長で、日本女子大学教授である坪能由紀子氏は、「2007 年日本における学習指導要領音楽科の改訂を探る」というテーマのなかで、グローバルそしてローカルな視点から、子どもが音楽を創ることと聴くことを論じ、元韓国音楽教育学会会長で、韓国国立教育大学教授の Hongsoo Lee 氏は「次の 50 年間の韓国音楽教育学会の課題」というテーマにおいて、音楽教育の本質化と韓国的近代化について述べられた。いずれの講演もこれからの音楽教育のあり方に大きな示唆を与えるものであったと感じた一日であった。

3-3 国際交流委員会 海外の動向 その4

日韓双方で情報共有が望まれる資料 相次いで刊行

藤井浩基（島根大学）

1. 洪蘭坡の本格的な年譜の完成

日本の小学校で使われている音楽の教科書に、韓国の童謡「故郷の春」（または「ふるさとの春」、李元寿作詞、洪蘭坡作曲）が掲載されている。音楽の授業だけでなく、「総合的な学習の時間」や国際交流の場で歌われることも多く、韓国の代表的な歌として日本の学校にも定着してきている。

作曲したのは「韓国近代音楽の父」ともよばれる洪蘭坡（ホン・ナンパ 本名 洪永厚 1898-1941）である。作曲、バイオリン演奏、音楽評論、音楽教育、音楽雑誌編集発行など幅広い音楽活動を行なった他、新聞紙上で小説連載なども行ない、多面的な才能を発揮した。日本、アメリカへの留学経験があり、

日本では東京高等音楽学院（国立音大の前身）他に学び、演奏活動も行なっていた。

このような洪蘭坡の多才な人物像は、日本ではまだあまり知られていない。洪蘭坡に焦点を当てた文献は、遠藤喜美子著『鳳仙花—評伝・洪蘭坡』（2002 東京：文芸社）である。学術的な文献というよりは、むしろ啓発書としての意義が大きい。

ところで、韓国の状況はというと、もちろん国民的な音楽家としては知られているものの、学術的な整理がなされ、正確な情報に基づいた人物像が形成されてきたとはいえなかった。

こうした中、2006 年に『新訂 蘭坡—洪永厚 年譜』（蘭坡年譜共同研究委員会編）が

刊行された。履歴書、著作、演奏会プログラム、新聞や雑誌に掲載された洪蘭坡関連記事を網羅した本格的な資料である。年月日順に事項が整然と配列され、洪蘭坡の活動の全体像を鳥瞰する上で非常にわかりやすい。また、事項毎に詳細な注がつけられており、学術的にも丹念に裏づけられている。

『年譜』の編集、執筆に中心的な立場で携わったのは、国立韓国芸術総合学校音楽院の閔庚燦（ミン・ギョンチャン）教授である。音楽史の立場から韓日関係を研究する第一人者として知られる閔教授は、『年譜』の完成について、「本格的な洪蘭坡研究は今始まったばかり」と謙虚な姿勢を貫いておられる。生年月日といった基本的な情報においても、通説とされてきたものを訂正するなど、これまでの洪蘭坡研究を根本から見直そうとする姿勢がうかがえる。

ただ、残念なのはこの『年譜』が韓国語で書かれていることと非売品ということである。いずれ日本語版が刊行されることを望みたい。日韓両国で、洪蘭坡に関する情報の共有が可能になれば、教材としての「故郷の春」も、より理解が深まり、新しい切り口からの学習の展開が期待される。

2. 韓国の重鎮声楽家から日本への便り

次に日本語で書かれた本を紹介したい。李仁栄著『新^{むくげ}槿花通信』（2007 ソウル：東西文化社）である。著者・李仁栄（イ・イニョン）氏は、韓国を代表するバス歌手として一世を風靡し、現在 78 歳である。大韓民国芸術院会員でもあり、韓国音楽界の重鎮として尊敬されている。本書は著者自身により日本語で執筆された一代記である。

1929 年に釜山に生まれた著者は、終戦、植民地解放後まもない 1947 年、18 歳の時に日本で声楽を学ぶことを志し、小さな漁船

に乗り込み密航する。命がけでたどり着いた日本でゼロから出発し、東京芸大に学び藤原歌劇団で活躍するまでになる。1960 年に帰国し、ソウル大で教鞭を執るかたわら、演奏活動を展開し、国際コンクール審査員や各種音楽団体の会長等を歴任した。スミ・ジョー（曹秀美）をはじめ、世界的な声楽家を多数輩出する韓国声楽界の礎を築いてきた人物といえる。

本書は自らの苦難と栄光の歴史を振り返る単なる自叙伝ではない。日本人に対する手紙として書かれ、話しかけるような語り口の中に、韓国と日本の間の歴史、政治問題への提言、比較文化論、自身の音楽教育観など、さまざまな話題を織り交ぜつつ、自身の生涯を振り返る。特に、暗い船底に隠れ生死をかけて密航するところから、藤原歌劇団の舞台上でスポットライトを浴びるまでのサクセスストーリーは圧巻である。もちろん、韓国と日本の音楽教育史を遡及する上での貴重な証言も多数含まれている。ただ、こちらも残念なのは日本語で書かれていながら、日本の書店に並んでいないことである。

韓国では国家的なプロジェクトとして、「時代の生き証人」でもある各分野の重鎮に対し、存命中にインタビューを行ない、その記録を蓄積し大規模なアーカイブを作る計画が進行中である。音楽では、この李仁栄氏、音楽評論家の朴容九（パク・ヨング）氏らが含まれている。

以上のように、音楽教育に関し、日韓双方で情報共有が望まれる資料が相次いで刊行されている。

2008 年 1 月には待望の日韓合同セミナーが開催される。日韓両国の研究者が新しい知見や情報を持ち寄って、活発な議論や情報交換が交わされるものと期待される。

3-4 ISME 2008 ボローニャ大会に向けて

奥 忍 (岡山大学)



ISME 第 28 回世界大会は、2008 年 7 月 20 日～25 日にイタリアのボローニャ・コンセルヴァトワールをホストと

して開催される。2007 年 7 月 12 日～21 日に、その準備を兼ねた ISME 理事会がボローニャで開かれた。

ボローニャの文化的中核はヨーロッパで最古の大学と言われるボローニャ大学である。街全体に中世の雰囲気漂っている。通りを巡るアーチ型の柱廊、マッジョーレ広場には、14 世紀に建築が始まり、今なお未完成だというサン・ペトロニオ聖堂、12 世紀自由都市として成立したボローニャの長官の住居、教皇派と高さを競った皇帝派の 1 対の斜塔等々、数え上げればきりがなし。何世紀もの年月を経た建物がそのまま現在でも使われているのもボローニャの魅力である。

ISME の会場となるコンセルヴァトワールはボローニャ大学の 1 画にあり、これま

たアーチ形の門をくぐると緑の中庭、石の緩やかな階段には創設者、マルティーニの胸像、背の高い重いドアを開くと天井には目を見張るばかりの描画の数々。会場の下見だけで、奥深いイタリア文化と音楽の結びつきを感じ入ってしまう。

ISME の魅力の一つは、公募によって選ばれた演奏会で世界中から多種多様な音楽に接することである。ヨーロッパの由緒ある様式の建造物の中で多用なオリジンの音楽がどのように響くか、大変楽しみである。

2008 大会には当然のことながらヨーロッパから多くの参加が期待される。また距離的に近いアフリカも少なくないだろう。加えて 2010 年開催予定の中国など。

かつて、すべての道はローマに通じていたとのことであるが、2008 年には、世界中の音楽と音楽教育がボローニャに集まるだろう。「あらゆる年代の人々と音楽」をテーマにするこの大会にかける実行委員会の意気込みも大変なものである。

(詳しくは同封のちらしをご覧ください)



4. 国内トピックス

平成19年度第1回中国四国地区例会

平成19年9月22日（土）にエリザベト音楽大学で、以下のように「第1回中国四国地区例会」を開催いたします。今回は「箏のワークショップ」をおこないます。開催大学では、箏を30面程度用意してください。準備の都合上、あらかじめ参加者数を把握したいと思いますので、参加ご希望の方は、8月末日までにお申し込みください。皆様お誘い合わせの上、是非是非ご参加ください。

「平成19年度第1回中国四国地区例会」

ワークショップ

- 1) 日時：平成19年9月22日（土）13時から
- 2) 会場：エリザベト音楽大学
- 3) テーマ：現代箏曲の世界—沢井忠夫を中心に—
- 4) 講師：若岡史子氏（沢井箏曲院教授・中国支部支部長）
- 5) 内容：
 - ・お話「沢井忠夫の箏曲の世界」（ビデオ視聴）
 - ・若岡史子講師らによる演奏

・講師の指導による会員の練習・演奏
……沢井忠夫の作品「Kのための斗為巾」（1991年作曲）

- 5) 持参物：ご自分の爪をお持ちの方はご持参ください。
- 6) 参加申込：「ご氏名、懇親会の出欠、連絡先アドレス」を記入の上、〆切日までにエリザベト音楽大学の野波健彦先生まで郵送、（あるいはメールかファックスで）お申し込み下さい。ワークショップですので最大60名を予定しています。中国四国地区以外の方で参加希望者は担当大学野波先生にあらかじめご連絡ください。
- 7) 申し込み〆切：8月31日（金）
- 8) 申し込み先：〒730-0016 広島市中区鞆町4-15 エリザベト音楽大学 野波健彦
Tel.082-221-0918, Fax.082-221-0947
Tel.&Fax（自宅） 083-925-6712
E-mail（大学）：nonami@eum.ac.jp
（自宅）：take-non@agate.plala.or.jp

（中国四国地区理事 小川容子記）

6. 事務局からのお知らせ

7月より、次の方々が新しく参事さんとして加わってくださいました。従来から活躍してくださっている5名の方とあわせて、9人の参事さんが力を貸してくださっています。編集委員会・日韓ゼミナール実行委員会関連業務、理事会記録、ニュースレター校正、大会プログラム作成などの仕事について、積極的に進めていただいています。

高鶴ゆら・前木洋美・栢沢未紗・味府美香

編集後記

今期のニュースレター担当の一人として、広く国内外の音楽教育の学問研究ならびに教育実践研究に関する情報交換の場とすることをめざしてきました。しかし、実際には、その任を果たせたとはいえなかったことを深く反省しています。

国際交流委員会からの世界各国の研究動向のシリーズや国際学会の情報、海外トピックスにおける世界各地で開催された国際学会の報告など、海外に関する情報はこのところますます充実してきて嬉しく思います。それに引き換え、国内トピックスならびに会員の動向・活動については、今号も広く情報を集めることができませんでした。

ニュースレター編集のあり方を抜本的に検討する時期にきたことを感じます。約1500人の会員を擁する本学会において、より幅広い会員にとって意義あるニュースレターとするために、ニュースレターに求めるもの、載せてほしいもの・載せたいもの、ニュースレターへの窓口の在り方などについて、積極的なご意見をお寄せくださいますようお願いいたします。 (加藤富美子)



冷夏との天気予報はどこへやら、この夏は猛暑です。その猛暑にめげず咲き誇るのは、キョウチクトウとサルスベリ。ムクゲはかなりぐったりしていて花の勢いがありません。そんな中でひっそり咲き続けているのがノリウツギです。炎天下、バス停まで歩いてゆく途中の木陰で見つけました。ウツギながら空木ではなく、花の形からも紫陽花科です。他の紫陽花がとっくに花を咲き終えたのに炎天下、まだ咲いている。9月になるとこの白い花が色づいて赤くなります。そう思うといっそう愛おしくて立ち止まっていたのですが、いけません、バスが来ました。

〔村尾忠廣〕

【日本音楽教育学会役員 2005-2007年度】

会長：坪能由紀子 副会長：岩崎洋一・加藤富美子

常任理事：有本（小山）真紀（事務局長）、佐野 靖・村尾忠廣（総務）

阪井 恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥 忍（会計）

岩井正浩（編集委員）

理事：寺田貴雄（北海道）、宮野モモ子・井口 太・熊木真見子・山本文茂（関東）

篠原秀夫・中山裕一郎（北陸）、南 曜子（東海）

安田 寛・嶋田由美・若尾 裕（近畿）、小川容子（中国）、田邊 隆（四国）

木村次宏（九州）

参事：大沼寛子・駒久美子・祝田（夏目）佳子・裴珉卿・間瀬三奈・高鶴ゆら・前木洋美

栢沢未紗・味府美香

事務局：中村幸子・岩渕育子・山本華子・亀山さやか

【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイッシーダ1-102

【私 書 箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>